

北海道における仏教福祉の歴史

須藤 隆 仙

(函館市称名寺住職
北海道史研究会主宰)

はじめに

「仏教福祉」の意義については学者の論議があるようだが、筆者は、要するに、仏教理念から発動された福祉的活動であろう、と解釈している。

今、北海道という地域に限定して、そういった活動の歴史を略述してみたい。

近世の北海道（蝦夷とか蝦夷島と呼ばれた）は、松前藩によって、南端部を和人地（松前地）とし、以北をアイヌ地（蝦夷地）として、両者の交通が禁じられていた。アイヌ地には藩の許可を得た者のみが定期的に行ってアイヌと交易した。しかしそれは海岸地帯だけであって、内陸部が

開けたのは明治になってからである。そういった北海道史の予備知識がないと、資料が道南に偏っているなどと滑稽な評をする人が出たりする（かつて筆者の北海道仏教史研究にそういう評をした人がいた）。この点を念頭において読んでいただきたい。

以下、便宜上、「医療関係」「土木関係」「教育関係」「慈善関係」「教護関係」「開拓関係」の六項目に分けて記述する。

医療関係

仏教では病苦救済の仏として薬師仏が信仰されるが、医薬が今日のように発達していなかった時代にあっては、こ

の薬師仏を祀ることが、病苦に対する重要な対処方法であった。それは今日でも生きており、薬師仏への願掛けが見られる。病いは気からといわれるとおり、病気にはこういった心掛けが大切である。

昔の僧侶は、そういったことを意識して、薬師仏を祀ることを実行した。

『新羅之記録』という松前氏の古記録に次のような話が出ている。「宇須岸^{ウスケシ}全盛の時、毎年三回づつ若州より商舶来り、此所の問屋家々を諸汀に掛造りと為して住む。依て、纜を縁の柱に結び繋ぐなり。随岸寺の開山嘉峰和尚は若州の人たり。商舶に乗りて渡りし時、稚松を鉢に植えて持ち来れり。此松大木と成り、其枝条皆若州の方へ差^ふ偃す。肆^{ゆゑ}に思の松と号せらる。然るに嘉峰和尚遷化の後頃に彼の松枯稿す。衆人奇異の思を為し、嘆の松と云ふ。ここに随岸寺二世寂峰和尚、此松の枝を切り医王如来の像を造立する。此人元来若州の人たるの故に、遠く若州に勧進し、御堂を建立せらる」。宇須岸は現在の函館市西部地区であり、その全盛時というのは、北陸からさかんに昆布を買い船が来ていた室町時代初期をいう。随岸寺は長禄三年

(一四五九) 宇須岸から大館(松前町)に移るが、とにかくこんな早い時代に北海道の一隅に医王如来(薬師仏)が祀られたことは、注目すべきである。随岸寺の宗派は曹洞宗か浄土宗と考えられている。函館山はその後も江戸時代になって薬師仏が祀られ(おそらく仏僧の手になったものであろう)、江戸時代には全山を「薬師山」と呼んだのである。現在薬師山の名は一部の峰のみに残っている。

また、江差追分で有名な江差町の南隣に上ノ国町があり、ここに夷王山^{いおう}という山がある。これは松前氏祖武田信広(室町初期の地方豪族)を祀るので、夷王(蝦夷島の王)山だというようにいつているが、それは後の話であって、昔は「夷王」でなく「医王」と書かれ、医王山だったのである。つまり薬師仏を祀る山だったのである。事実ここには夷王山神社があるがその旧称は医王山薬師堂である(一説に永禄元年へ一五五八へ創立)。後に医王を夷王と改竄して武田信広に付会したのであるが、れっきとした薬師信仰の山である。上ノ国には早くから仏僧が入り込んでいた史料があり、その僧の手で薬師仏が祀れたものと考えられる。

その他、道内の温泉場で薬師仏を祀るところがあるが、これらも仏僧の指導によるものが多かったようだ。例えば函館の湯川温泉には早くから薬師仏が祀られており、承応二年（一六五三）松前藩侯の子息千勝丸（のちの九世高広）が病んださい、母の清涼院が夢告でこの温泉を知り、湯治させて全快したので、翌年お礼に知内（函館西方の地）の砂金で造った薬師像と、唐金造りの鰐口とを奉納したとい（現存）、それが現在の湯倉神社である。

こういった動きの中で、とくに行動が顕著で、内容も仏教福祉というのに全く相應しい活動をした人物に、美泉定山^{みずみじょう}という僧がいる。かの北海道の観光地として有名な定山溪温泉の開発者である。定山溪とは僧定山の名をとったものなのである。彼は温泉を開いて病悩者を広く救おうと考え、苦勞に苦勞を重ねたすえ、ついにこれを成就させたのである。

定山は備前（岡山県）の人で、文化十二年（一八一五、異説もある）の生まれといい、父は繁昌行弁^{しげあきこうべん}という僧で、その次男に生まれた。北海道へ渡ってのち姓を美泉と定めているが、おそらく温泉をもじったものであろう。真言の

行者として育った彼は、十六、七歳のとき諸国遍歴の旅に出、高野山や出羽三山に参籠のち松前に渡った。ここから北の大田^{おおた}というところに入り、そこで道路開削の事業をしているが、これは「土木関係」の項で話す。やがて文久元年（一八六一）小樽の張碓^{はりす}村へ移るが、ここで彼は湯治場経営の第一歩を踏み出すのである。張碓で知った人に葛山某^{かつらやま}という幕吏がいたが、この幕吏は人を雇って張碓川のほとりで鉱泉浴場を経営していたのである。定山はこの浴場よりさらに奥に温泉があるのではないかと考えたのであった。彼は漁家の豊漁祈禱や、病氣平癒の祈禱などを専らとしていたが、暇あるごとに付近の山谷の探査を始め、ついに村落から二十町ばかり離れた川上右岸の沢に鉱泉を発見したのである。ここを湯治場になると多くの病悩者を救うことができると考えた彼は、葛山などの応援を得て浴場を造り、人々を湯治させたのであった。人々は「湯の沢」と呼んで喜んだという。あるとき彼は、湯の沢の背後の山を越えていくと天然の温泉が湧き出ていると、アイヌから聞いたのであった。そこを開発すると、また人助けができる、彼はそう思うと矢も楯もたまらなくなって、アイ

ヌを先達として山越えをし、その現場に行ってみた。だが七里もの山越えをせねばならぬ場所なので、まず道路の開削こそ先決であると考え、葛山に頼んで付近の漁民に協力してもらい、山道開削工事に着手したのであった。これが出来ると定山は、ささやかな仮小屋を建てて、誰でもが来泊湯治できるようにしたのである。ここに初めて定山溪温泉の基礎が築かれたのであった。だが目的が全く完遂されたわけではない。通路が出来たというものの、それは非常に險しく、病人ではとても通うことすら困難で、定山はさらに安全な通路の必要を痛感、その実現へと邁進することになったのである。ところが国情は一変して明治維新となり、明治新政府の石狩司事が着任したのであるが、定山はさっそくその司事を訪ね、温泉開発援助方を懇請したのである。司事は定山の志を喜び、白米二俵を与えて激励したのであった。ところが間もなく箱館戦争が起り、司事は青森へ退去、ためにその援助は立ち消えとなってしまうのである。その後、島義勇が開拓判官として札幌に来たので、定山は島に頼み、島も定山を信用し大いに助力することを約したのであるが、島はたった四カ月で転任し

たのであった。その後、岩村通俊判官が来札、定山の願望は岩村判官によって容れられ、豊平川沿いに道路が開削され、浴室、宿泊所が新設され、定山は湯守りを命ぜられて、扶持米をもらう身となったのであった。ここに初めて官設の浴場となったのである。時に明治四年七月のことであった。しかし官設温泉とはいえ、道路などなお十分ではなかったが、幸い大谷派本願寺が道路開削の大事業を起こしたお陰でその恵みにあい（「土木関係」参照）、東久世通禧開拓長官は定山の功を賛えて「定山溪」と命名してくれたのである。こうして定山の血の滲むような努力によって出現した定山溪も、明治七年には開拓使のつごうで官営でなくなり、定山の湯守り職は廃されてしまったのであった。だが定山は独力での経営を考え、知人から米・味噌をもらい、札幌に出て托鉢するなどし、窮乏のなかにこれを維持していったのである。その日の食にも困る極貧のなかにも、定山の定山溪温泉に対する熱情はますます激しさを加え、ついにことと小樽とを結ぶ道路開削の計画を立てるにいたったのである。当時の札幌新聞は、その間の消息を「抑も定山溪は札幌より巳午に当り、里程凡そ七里、小樽

土木関係

より殆ど七里半にして辰巳に当れり。同所より温泉場へ直線に新道を開けば大に便宜なるべしとして美泉定山は三人の杣子を率へて明治九年八月一日より新道測量をはじめ、十三日を費して其図漸くなる」と伝えている。しかし、これも測量はしたものの経費の出所がなく中止のやむなきにいたったものである。かくて、明治十一年十二月三十一日、定山は忽然として行くえ不明となり、この世から姿を消してしまつたのである。山中に事故死したのか、思うところあつて自ら生命を絶つたのか、今に謎は解けないが、とにかく一生の大半を、道路開削と温泉経営とに捧げた彼は、地藏菩薩の化身、薬師如来の化身、と崇められているのである。また定山と定山溪は「恩讐の彼方へ」の禅海と耶馬溪に通ずると賛える人もいる。

近代この面で注目すべきものに、札幌市の浄土宗新善光寺の活動がある。同寺二代住職林玄松は、老人福祉を念願して檀信徒と謀り、大正十四年十月藻岩山麓に札幌養老院を創立した。その昭和二十四年に至り附属病院を建てた。現在、太田隆賢住職が理事長で経営している。

行基菩薩が、池を堀り堤を築き、道路を開き橋を架けたりして歩いた話は有名だが、こういった土木関係の成果も、福祉の大きなものであった。

北海道にも早くにこの面で働いた僧もいたかと思われるが、史料としては幕末以降のものよりない。「医療関係」が述べた定山溪温泉の開発者定山の業績は土木の面でも贅えられるのであり、渡島間もない定山は江差を少し北上した太田というところに一時滞留し（安政年間）、ここで蝦夷探検家松浦武四郎に謀り、独力で難所の道路を開削した。仁辺志内―樋ノ沢間、樋ノ沢道として人々に大変感謝された。ところが話合役人が定山（当時、宗健と称していたらしい）を妬んで追放したという。定山は箱館に来て奉行に訴え、奉行は気の毒に思い再び太田に住まわせて功を賞したという。定山の以後の業績は「医療関係」を見られたい。

この面で特筆すべきものに、西本願寺派僧の水利工事と、東本願寺の道路開削工事とがある。

幕末以前の蝦夷松前地では、西本願寺派の布教や寺院建立が禁止されていた。これは東本願寺が松前氏と特殊関係を結び、自派だけで布教を独占したためであって、西派信徒が寺院建立を出願して罰せられたいきさつもある。ところが安政の開港で蝦夷島の大半は幕府の直轄地となって松前氏の手から離れたため、西本願寺はこの機を見逃さず幕府に働きかけて、蝦夷島での布教権を獲得したのであった。ここに始めて北海道最初の西派寺院が小樽と函館に出現したが、安政四年（一八五七）のことであった。これらの運動を実際に推進させたのは、堀川乗経（初名法恵）という下北（青森県）の西派僧であるが、彼は東派の領分に食い込むには、尋常の手段ではだめだと考え、開拓や地域開発で迫まろうと本山に具申し、許されて函館郊外に北陸などから信者を入れて開墾し、また函館地方の水利改良に着手した。当時の函館は箱館と書き、現在の函館山裾のみの街で、それ以東の広地は陸係砂洲で井戸水がなく、住民の東部進出が大きく阻まれていた。加えて隣村亀田村（現市内）に蛇行する亀田川は、ときおり氾濫して村民を悩ませていた。乗経はこれに着眼したのであり、その亀田川を

直線で函館山裾まで引き、在来の堀割へ流し込んで函館港へ注がせるというものであった。するとその新川は飲用水になるから付近に住民が移住して街は膨張し、旧川部分の氾濫も防げ、住民福祉と地域開発の大利点になるのである。乗経は本山からの援助を基に信者から募金して経費を工面し、松川弁之助という土木業者に請け負わせて、安政六年五月起工、同年十一月完成したのであった。新しく掘削した川は延長一五八〇間（約二八八〇㍎）、橋八カ所で、費用は七三〇〇両かかった。乗経はこれを京の堀川に因んで堀川と呼ばせ、のち自らの姓としたのである。箱館の西派寺院は初め乗経の下北の寺・願乗寺の出張所のかたちで建てられ、願乗寺名で通っていたので、人々は川を願乗寺川とも呼んだのであった。この川はずいぶん住民に利用されたものであるが、これを中心に街が膨張するに及んで、投棄物で汚染されて不衛生になったため、明治二十一年上水道が函館区で計画され、願乗寺川は津軽海峡浜へ転院させ（現在「新川」と呼ばれている）、もとの川跡は翌二十二年埋めたのである。この川跡は現在「高砂通り」と呼ばれて、函館市街を貫く幹線道路になっている。寺は

この功により官から土地一万二一八坪を賜わったのである、ために現在も本願寺派函館別院は広大な土地を有している。

東本願寺の道路開削は有名な話で、今に北海道への観光客は、「本願寺道路」の話を耳にすることである。本誌第七号にも三吉明氏が『北海道開拓期における仏教の役割』と題して紹介している。詳細はそちらに譲るが、東本願寺は明治二年新政府に北海道開拓の旨を出願し許可された。江戸時代を通じて幕府と親密であったことを転換解消させるための策、と評する書もある。同寺の開拓目的は新道切開、移民奨励、教化普及などの三点で、新道切開については翌三年、新門主光瑩自ら百数十名を率いて札幌に到り、業務を鼓舞して帰った。翌四年七月までに開削された道路は、軍川―砂原間（約一八^キ）、札幌―伊達村尾去別間（約一〇五^キ余）などで、ほかに大野―江差間の四四^キを人に請け負わせて改修させた。延人員五万五〇〇〇余人を動員、所要経費一万八〇五七両余であった。

札幌―尾去別間は有珠新道であるが、これがいわゆる「本願寺街道」とか「本願寺道路」とかいわれるもので、

函館と札幌を結ぶ幹線道路として計画されたものであった。文化年間に近藤重蔵が踏検し、安政年間に松浦武四郎も再踏したところで、重要性が認められながら経費の関係で着手できなかったのを、明治二年秋、東本願寺が使いを派して調査させたさい、松浦武四郎に勸説され、この道路開削を計画するにいたったのである。すなわち函館を北上して砂原または森に出、内浦湾を船で室蘭に渡り、伊達紋別―尾去別―壮瞥を経て定山溪に出、平岸から札幌へ至るものであった。工事には多数のアイヌ人も働き、また紋別に移住して食糧不足に悩んでいた伊達邦成（仙台亘理城主）の家臣も参加した。明治六年に新たな札幌本道が築造されてから、この本願寺道路はほとんど利用されなくなったが、しかし一時は北海道開拓で本山から渡来し内陸部へ入る人たちの重要な道路だったのであり、開拓史上忘れてはならない存在なのである。またこれを造るため雇用された人たちは、仕事を不得助かったのであり、困窮者対策、失業者対策ともなったのであった。

また有珠（伊達市）の浄土宗善光寺も明治初年に付近の道路造成を命ぜられ、苦勞してこれを成したという。

教育 関係

寺小屋の言葉があるとおり、昔の僧侶は教育にも挺身した。蝦夷島と呼ばれた北海道に僧侶が住みついたのは意外に早く、室町初期には来ていたものである。その人たちは子供に文字などを教えたであろうことは想像に難くないが、それを知る史料は江戸後期以降のものよりない。道南に散在する寺院の住職が、近所の子弟に読書を教えたとする口碑は若干あるが、その面で注目されるものに、「蝦夷三官寺」の僧の教育活動がある。蝦夷三官寺というのは、江戸後期に幕府が蝦夷地を松前藩から取り上げて直轄地とするに及び、その経営策の一環として官立の寺院を設け、これをフルに活用して、治安、教育、文化、行政などの機関としたもので、文化元年（一八〇四）太平洋岸の有珠（伊達市）に浄土宗善光寺、様似（様似郡）に天台宗等澗院、厚岸（厚岸郡）に臨済宗国泰寺が、それぞれ設けられた。これら三官寺の住職は、浄土宗にあっては増上寺、天台宗にあっては寛永寺、臨済宗にあっては建長寺において、各々高僧を選定して派遣したので、学徳兼備の僧が本

州から渡ったのである。いずれもアイヌの住む土地で、外はわずかに役人とアイヌ交易を許された商人とよりいい土地に、急に高僧が本州から来たのであるから、当然、文化や教育の面で新しい動きが見られるようになった。蝦夷地探検の第一人者といわれる松浦武四郎は、その著『東蝦夷日誌』の中で、善光寺に関して、以下のように述べている。（一）は割書・原註。

「文化元〔子〕年、浄土宗大白山道場院善光寺壮海、〔翌丑〕三月出立〔休明光記〕し、建組半にして遷化し給ふ。二世鸞洲上人は筑前の産にして、法徳四方に隠れなく、徳本行者と同じ紀州須賀谷に山居なし給ひ、後に行者を江戸に誘引し、自分此地之渡り此一寺を建立し、文化四〔丁卯〕年五月俄羅斯乱の時には、処々仏幡を立て、土人に地を守らしめ、身は彼等が炮丸に死すとも、外夷の耻を受事なかれと教撫し、一紙の垂誠を作り、是と一枚起証に夷言を附梓にのせ、又、後世の枝折といへる書を著して施し、又或時は大なる数珠にて夷民に百万遍をくらしめし等も、其法筵に連る者五百人余、是此地にて念仏の始め也（中略）。また三世弁瑞上人も行者の法弟にて、道德著き

御方なりしと。常に場所を廻り、米袋を荷はせ、病人孤独等有時は手当し、後世の事勸め、若者には子引歌といへるを作り、是を蝦夷語もて教へ、自ら鉦打鳴し舞踊等し、また様にのせ、和人共にも施し給ひし故、今に上人を念仏カモイと云て尊敬しける也（中略）如此大徳の懸錫なし玉ひしが故、今に黒髻の胡女^{コメ}まで称名念仏する事とは成たり（中略）又、土人に片仮名を教え給ひし由。続て弁定（四代）、弁諦（五代）、順立（六代）、仙海（七代）と法灯依然とし千島の隈を^よ赫す。是偏に仏法不思議の^{いふ}謂、愛に有る。仰ぎ尊ぶべき事也。」

また等澗院に關しては次のようにある。「帰嚮山等樹院厚沢寺。本尊薬師如来。天台宗東叡山末。享和二年台命にて建立、入仏文化元甲子年。開基秀曉。慈順、恵統、慈縁、慈潭、慈謙、亮堅、徳善、広道現住す。三世恵統の代に自在心院の宮にねがひて東照神君の神号をたまひ安置せられしが、五代慈潭の時に至て外夷海岸に出没、もし非常の時にはとて返上せらる（中略）四代慈縁大僧都は山門千葉院に住し東台凌雲院の手代を勤められしが、田安一位公其洪徳にふかく帰依し、其方国家經濟に委しきを以て、創業の

地へとて此寺に住職被仰付しが、此辺の土人等多く和南の教化にあつかりしに、其地豪熊有て土人を多くなやませ、また馬を取くらしい、諸民の難渋一と方ならざれば、是を狩らんとするに、却て身を害なふ者多かりしと。或時此熊当寺の門に入來たりけるを、和南仏殿のおしひらき、熊の怒れるに向て悠然と十念を授け給ふと。熊心有げに低頭して徐々と山に入しが、其後何処に行しや、曾て人馬を害ふことなかりしと。僧都そののち信州戸隠山の再興をなし、川越喜多院に転じ遷化すと。」

また国泰寺に与えられた掟書（厚岸資料館に現存）には、天下泰平国家安全の勤行怠慢あるべからざる事、蝦夷をして本邦の姿に帰化せしむる事、毎々より死亡の民をして未來とくだつせしむる事、隣邦の外夷渡來したるとも国のあざけりならかしむる事、とある。同寺初代住職文翁は有徳の人で、残念ながら文化二年十一月に死んでゐるが、その墓銘碑に「武州の人なり。業を江戸龍興陽国和尚に受く。萬源禪師の法を嗣ぎ、相州光明寺に住し転じて建長の第一位たり」とある。文翁が死んだとき、アイヌの人たちは、「文翁和尚のような偉い人が死ぬはすがない」といっ

て、その死を信じなかったという。

これら三官寺の僧は、アイヌに文字を教えたり、近隣の子弟に読書を教えた。山崎長吉著『北海道教育史』に、「国泰寺には日鑑記とともに村学校建設の趣意書と学規が残されている。村学校は寺院建立当時から代々の住職が師匠になって子弟に教えたものと推察され、本堂と庫裡を教室代わりに使用した。継続年数は明らかでないが明治十一年まで続いた。」とある。

善光寺には仙海再版の子引歌（弁瑞作、弁定追歌）の板本があるが、「これや人々をしへ聞けよ、はやひおそひかいち度は死ぬぞ、しぬがいやならねん仏申せ、まうす人ならいつなん時に、かりのからだのしにたるとても、せみのぬけがらすつるがごとく、月も日もよくしせざる国へ、往て生れてころののままよ（以下略）」といった信仰歌に、「タバアン△ウタレ、エバカシ△コカヌ、トナシ△モイレカ、アリン△ユイ△ライナ、ライコパンチキ、ネンフチ△キイヤン、キイクル△ネヤキネ、センバラ△ヤツカ、ウウセ△ネトバケ、ライワネ△ヤツカ、ヤアキ△シセイペレ、ヲシヨラ△コラチ、チユブ△アフンハ、シヨモライ△コタ

ンタ、ヲマン△セカトハ、ヤエラム△アニネ（以下略）」とアイヌ語の訳を付けている。（法然上人の一枚起請文もアイヌ語に訳してアイヌ人に与えたといわれるが、その原本は現存せず、現在善光寺では新たにこれを作製して配布している）

このほか等澗院の僧もよくアイヌを教化し、明治十七年大蔵省出版の『北海道志』に「土人多ク其化ニ嚮フ」と記されている。国泰寺においても、七仏通戒偈の前二句、諸惡莫作・衆善奉行を「イデツキ、ヲビッタ。ウエングロ、ヲビッタ。ピリカキウドンシカマ」と夷訳してアイヌに称えさせ、また次のように五戒を夷訳している。

- 一、イテキ・ライゲ（殺生は禁ず）
 - 二、イテキ・イツカ（与えざるを取るは禁ず）
 - 三、イテキ・オモイヌ（姦姪は禁ず）
 - 四、イテキ・ヌユンゲ（妄語は禁ず）
 - 五、イテキ・トノト・イク（飲酒は禁ず）
- タナシキネ・イクツク・ピリカノ・ケウトム・オツタ
・シツカスマウ・ネーイタ・エーアルパ・ヤツカ・ヤ
イトバレワ・トナシノ・ホシビニハ（この五つの言葉

をよく内心に護持し、何れの処に行くときも自愛して早く帰れ)

このように、三官寺の僧の教育活動、とくにアイヌに対するそれは注目にあたえる。

明治になり寺小屋・私塾は漸次姿を消していき、新しい法令による学校が出現するが、安政年間から開港場になっていた函館には、西洋の文物が流入し、キリスト教立の学校がいくつも出現した。これに刺激されて函館の六寺院(浄土宗称名寺・東本願寺別院・西本願寺別院・曹洞宗高竜寺・日蓮宗実行寺・真言宗高野寺)が共同で、明治二十一年「六和女学校」を開設、同三十四年大谷派に護渡されて翌年函館大谷女学校(現、函館大谷高等学校)となった。大谷派では北海道慈善会なるものを設け、明治二十三年にも函館に恵以小学校を創立している(大正元年廃。)また高竜寺は明治二十二年に吉祥女学院を設けた(大正五年廃)。本願寺派函館別院も明治三十九年に実践女学校を開設している(昭和九年廃)。

とくに注目すべきものに、明治二十二年江差の八寺院(浄土宗金剛寺・東本願寺別院・西本願寺別院・曹洞宗正

覚院・日蓮宗法華寺・浄土宗阿弥陀寺・真言宗観音寺・同曼荼羅寺)で、「江差英語研究所」を開設していることである。西別院を教場にあて、運営費は各寺院の月割金・有志の寄附金・授業料をもってしたが、これは同二十年頃キリスト教会がヤソ英語学校を設けたので、それに対抗するためだったと思われる。明治二十五年廃した。

真宗は学校経営に熱心で、前記のほかに大谷派は明治三十九年札幌に北海女学校(後の札幌大谷高等学校)を設け、大正十二年帯広に帯広大谷女学校(現、帯広大谷高等学校)を開校している。また本願寺派は成徳女学校(大正六年成美女学校として発足の職業学校)や北海夜学校を設け、昭和三十八年札幌女子高等学校を創設している。明治四十年本願寺派小樽別院内に設けられた小樽実践女学校は変遷を経て今は小樽双葉女子学園高等学校となっている。

このほか、二次大戦後は各宗とも学校設立に力を注ぎ、現在北海道には、右述のほか次下のような宗立学校が存在する。旭川竜谷高等学校(本願寺派)、帯広大谷短期大学・札幌大谷短期大学・札幌大谷高校付属中学校・函館大谷女子短期大学・室蘭大谷高等学校・登別大谷高等学校・稚内

大谷高等学校（以上大谷派）、岩見沢・駒沢短期大学・苫小牧駒沢短期大学・駒大付属岩見沢高等学校・駒大付属苫小牧高等学校（以上曹洞宗）。

幼稚園も戦後寺院経営のものが増えたが、大谷派では大正十四年に山鼻幼稚園（後の札幌大谷幼稚園）を設けている。

慈 善 関 係

「慈善」という語の解釈には問題もあろうが、一時期、福祉の仕事は「慈善」の名のもとに行われていたことがあり、『広辞苑』に慈善を「不幸・災害にあって困っている人などを援助すること」と解釈しているので、その点に絞って述べることにする。

仏教は慈善を説くから、この教えを自覚して、自然慈善的行為をする僧がいたのは当然である。

江戸中期の狂歌師で儒・仏学者としても名を知られた平秩東作（立松懐之）は、天明三年（一七八三）事情あって松前地の江差に渡り越年したが、滞留中の見聞を『東遊記』なる一書にしている。その中に次のような一文があ

る。「正覚院の先住智醉禅師は有徳の人也しと云。常に貧者を憐みて衣食を与たへられければ、其身は寒中にも古き小袖一ツにて暮されけり。往年此所飢餓有しに、和尚つとめて富商の家に募り、貧民を救はれし事其数多し。檀那より新衣を製しておくれば、乞食などの凍えたるを見て忽ち脱ぎ与へ、其身は合羽など下に着て居られき。柴田与惣兵衛と云もの頗る家富り。和尚かれの家に於て、其方米の貯あらば我に三俵をあたへよ。飢餓にせまるもの有。つとめて是を救へども力足らずと、切に求められけり。与惣兵衛云様領主よりかゝるものを救ひ玉ふべきに、いらざる世話をし玉ふといひければ、和尚大に怒りて、与惣兵衛を取て引伏せ、囲炉裏に有し大なる燃さしを持て、汝がごとき悪人をば我引導して成仏さすべしとて、ふり上て打たんとする此和尚大力なりければ、与惣兵衛手を摺て詫、人も側よりさまゝになだめければ、ゆるされけり。」正覚院は曹洞禅の寺であるが、智醉（別書は智雄ともあり）はいいつもこのような慈善行をしていたらしい。また強欲な富豪を諷めたあたりは、社会教育的な意味もつ。事実この文の後

に次のような話が続く。「常に醴酒を造り置て人々にふる

まいけるが、あるもの其禮酒を飲たる茶碗を其低置けるを和尙見て、門前迄出で行き、おのれは冥加を知らざる奴也。何故禮酒を吞たるものすゝぎては吞ざるぞとて、その者をかいつかみ来りて、茶碗を洗ひ飲されけり（中略）諸人其徳に伏し、領主も常に敬ひ給ひけり。」

有珠善光寺の僧が、駒ヶ岳噴火のさい、被害をうけた困窮者たちのため必死になつて援助の手を差し伸べた話もあるが、これは本誌第五号に、筆者が『蝦夷地善光寺僧による福祉活動の一例』と題して紹介しているので、それをご覧いただきたい。

明治維新時の箱館戦争（五稜郭戦争）は、多くの戦死者を出したが、旧幕軍兵の遺体は、政府軍に憚つて誰も手をつける人がないまま路外に放置されていた。このとき敢然としてこれが埋葬をなし遂げたのは、日蓮宗の信者柳川熊吉と大岡助右衛門とであり、彼等の相談に乗つて境内を提供し供養したのは、日蓮宗実行寺住職の松尾日隆であつた。かつては広沢虎造の浪花節（長谷川伸・作）にうたわれた美談であるが、これも広義には仏教福祉といえると思考する。

なお、本願寺派願乗寺では困民救済のための貧救院を計画したが、箱館戦争のため立ち消えになったのは惜しいことであつた。

明治以降の慈善事業は、総じてキリスト教が盛んに行い、仏教が遅れているのは残念だが、その中であつて、函館高竜寺（曹洞）の住職上田大法が、在家人仲山与七らの運動に協力して函館慈恵院を設立したのは注目にあたえる。仲山与七は明治三十三年、上田大法、寺井四郎兵衛の協力で、家一軒を借りて三人の老婆を收容保護し、やがて寺井が一五〇〇円と土地一四〇〇坪を提供し、上田と仲山が五〇〇円を拠出して新築し函館慈恵院を設立した。当初は收容者二十五人うち（孤児十一人）で、翌年社団法人組織とし、函館区から行旅病人取扱いの依頼をうけ、同三十七年育児部を増設、函館育児会社（明治二年育児講として出発、同四年育児会社とした貧窮者幼児の養育機関）の業務の一切を継承した。ほかに老人・行旅病人取扱いの三業種があつた。日露戦争時には出征軍人遺家族のために昼間保育所を開設した。他に特殊学校や養老院も経営した。慈恵院は戦後の昭和二十一年函館厚生院と改称、同二十七年

社会福祉法人となり、現在は中央病院・五稜郭病院・看護学院その他孤児や老人の施設を経営している。

大正十四年、札幌の浄土宗新善光寺住職のきもいりで養老院が設けられたことは前に記した(「医療関係」参照)。

昭和七年札幌の本派本願寺は苗穂託児所(大正十四年設)を無償譲渡してもらい、「苗穂慈育園」とした。

戦後はこの面の事業の多様化が見られるが、昭和二十三年寿都郡寿都町の大谷派西光寺の住職は、自己資金で引揚者收容所を設け、同二十五年引揚者住宅の安定により児童福祉施設として「歌棄洗心学園」を創設した。また磯谷郡蘭越町の大谷派法誓寺の住職は、昭和二十四年、当時なお放浪していた戦災孤児を哀れに思い、北海道中央児童相談所から二名を引き取って本堂で保護したのが、今日の「北海道愛星学園」に発展した。札幌の苗穂慈育園も戦後、戦災孤児を收容して中ノ島分園を開設したが、これは昭和二十六年真宗興正派最徳寺の秦住職を園長として独立し、興正学園(養護施設)となった。類する活動は近年増えているが省略する。

教 護 関 係

ここに「教護」というのは、受刑者教誨、免囚者保護、ないしそれに類する活動をいうのである。

教誨に関しては拙著『開道百年北海道宗教教誨小史』に詳しいが、要約すると以下のようになる。道内で早く監獄教誨が行われたのは函館懲役場で、明治九年二月から毎日曜日に、仏教の教導職が神道の人と共に出向いてこれを行っている。札幌では明治十一年六月、曹洞宗の小松万宗が札幌監獄署で教誨を行いたい旨出願し、許されて毎月曜日と免役日に出向いて行った。そのご間もなく真宗大谷派札幌別院もこの出願をなし、許可されて輪番や駐在の布教使が出張して行った。だがこれらの教誨活動は明治十五年頃になると、だんだん薄れがちとなったので、大谷派札幌寺務所出張所ではこれを機会に、あるていど計画性のある活動を考え、同年五月札幌県に「連月派出説教ノ定日御指揮被成下度」との願い書を提出、「毎日曜日午後二講席ヲ可開事」との指令を受け、寺務出張所から芳野法流、別院から大窪観空輪番外一名が六月十一日監獄本署に赴いて、

説教開業式を挙行した。

明治十四年に開庁された横戸集治監には、翌十五年八月、曹洞宗おとうしゅうけい鴻春こうしゅん侶が教誨を出願して十一月許可された。

鴻は寺宇の建立も計画、同十八年に北漸寺（月形町）を完成したが、この寺はことのほか集治監との関係深く、二世住職鶴原道波も教誨師として活躍した。とくに明治三十九年秋に現在の本堂・開山堂・客間・書院などの建築に着手したときは（四世鶴原鉄掌の代）、ときの典獄長屋又輔と協議して、囚人を雇役してこれを設立した。寺宝として月形典獄より贈られた釈迦如来画像や、ニセ札づくりで有名な熊坂長庵の描いた観音像を伝えており、囚人死亡者の過去帳なども保存している。

大谷派では教誨に特に力を入れ、明治十八年十月札幌監獄本署に御本尊を寄贈したりしており、交代で教誨に従事するもの六名を数えていた。同二十一年同派の中島円諦が樺戸にきて教誨を始め、翌年典獄の助力を得て説教所を創設した。これが月形町円福寺である。四代石沢典獄は職員クラブの建物を解体し、同寺の庫裡にあてている。

ところがこの頃、仏教とキリスト教とが、教誨上問題を

起こすようになる。もっともこれは、典獄が仏教信者であるかキリスト教信者であるかによって端を発したもので、仏教団体自体、キリスト教団体自体が衝突したものではない。明二十二年八月札幌監獄署に來た大山典獄は基督教信者だったため、仏教の教誨師を辞任させた。同二十四年八月横戸に來た大井上典獄も基督教信者で、仏教教誨師を辞めさせて牧師を採用した。北海道監獄はキリスト教一色となり、キリスト教教誨の全盛時代を迎える。

しかし仏教側は再び活動のできる機をうかがっていた。札幌では二十三年大山典獄が転出し、二十五年には牧師の教誨師も転出したので、再び大谷派が教誨を再開した。横戸集治監でも二十八年大井上典獄が転出、大谷派はさっそく新しい典獄に交渉して教誨師を送った。ここでは仏・基両教誨師が併存するかたちになったが、囚人には仏教教誨のみを希望する者が多くなり、基督教牧師また一教による活動を主張して仏教との併存を拒否し、これが許されないと知るや、こぞって東京へ引揚げてしまった。ここに再び教誨活動は仏教のみで行われることになったのである。それは大谷派のみによった。

もっともこのような問題があったといっても、それは教誨の一元化の問題であって、宗論のようなものが発生したわけではない。それどころか、網走のごときはキリスト教専有時代に、熱心な仏教の僧侶に教誨を委嘱するというケースさえあった。網走に來た大谷派僧寺永法專（石川県出身）は明治二十七年網走分監の有馬典獄に熱心に教誨許可を嘆願、それは数度に及び、キリスト教教誨全盛の時代に、有馬典獄は寺永の誠意に感心し、ついにこれを許したのである。寺永は後述のように免囚保護でも大活躍をした。

大正五年八月、旭川に札幌監獄旭川分監が設置され、大谷派僧が教誨を行っている。

なお現在の北海道内各刑務所では、各宗の教誨師が意欲的な活動をしている。

明治二十七年六月、一人の出獄者が、網走の永專寺に寺永住職を訪ね、獄中の状況を訴えた。寺永が刑務所教誨を決意したのは、これが動機だったといわれている。寺永は教誨師として獄中の様子をつぶさに見聞するに、刑期が満ちて釈放されても、交通は不便であり、引取人がないため

に別房に起居しなければならぬ人、またたとえ出獄しても再犯するか餓死するかより道がないような免囚者の状況がわかったのである。寺永はこれは人道上重大な問題であると痛感し、免囚者の保護ということを出願、同二十八年十二月許可を得たのであった。そして翌年二月、初めて免囚者二人を引受け、保護指導したのであった。明治四十年、自己所有地二万余坪を基本財産とし、會員組織で「寺永慈恵院」が生まれたのである。大正四年北海道庁から網走郡津別村大字達娯村ツベツに放牧地二五六町余の払下げをうけ、同五年から大谷派本願寺から補助金を受け、さらに同八年「網走慈恵院」と改称、同十五年には網走村大曲に收容保護場平家七〇坪、ほかに授産場・家畜舎を新築、財団法人として約五〇人を收容した。まさにこの面の大開拓者こそ寺永法專であった。永專寺の山門はかつての網走監獄の門である。

函館ではすでに明治二十一年免囚保護を個人でする人があったが、開拓事業に転じた（「開拓関係」参照）。明治四十年八月、函館監獄教誨師藤井大威、大谷派本願寺函館出張所録事藤井秀雄らの提唱で、監獄付属建物に仮事務所

を設けて、免囚保護の活動が開始された。事務所は翌年大

谷派函館別院内に移した。同四十三年大谷派本願寺の助成金を得て基礎を確立し、函館監獄付属地の無償使用許可を得て建物を新築、「函館同仁会」と称した。さらに大正四年財団法人「函館助成会」とした。同十五年以降、江差・瀬棚・寿都・森・八雲・南尻別・戸井・久遠・福山・本古内・奥尻などに支部をおき、職業斡旋や授産を行った。昭和二十五年更生緊急保護法の施行で更生保護会の許可を得ている。

札幌では明治四十二年十二月、大谷派札幌別院境内に北海道免囚保護場を開設、道内の各監獄から釈放の者を対象にした。経営主体は東本願寺北海道教区であった。大正二年苗保町に敷地三六六坪を購入して事務所と収容所を新築、同九年財団法人北海道授産所と改称、昭和二十六年財団法人「大谷染香院」と改名した。

釧路では大正元年十一月、大谷派聞名寺住職の主唱で、仏教各宗連合で釧路仏教各宗協和会を組織し、釈放者保護事業を開始した。同三年官民合同の会員組織で「釧路慈徳会」を設立、町内有志の慈善演芸会による益金や寄付金で

事務所や保護所を新築している。

このほか、函館には大正十五年に「函館和光保護会」というものが生まれ、単に出獄者だけでなしに、執行猶予者・起訴猶予者などの保護善導、および出獄者の家族の保護、その他感化を要する少年の保護指導も行った。この会は函館地方裁判所の検事正が函館仏教連合会にはかって創立されたもので、経営の主体は仏教有志寺院の協同団体であった。少年の保護善導の面では、昭和十七年函館郊外に和光学園を創設して、そこに少年を収容して教育を行ったが、二次大戦終結後間もなく、戦後の混乱で廃止された。

開 拓 関 係

北海道にあつては、「開拓」ということもまた、大きな福祉的意味をもつものであった。

蝦夷島と呼ばれた昔の北海道に本州和人が入ったのは案外早く、鎌倉末期には移住して来ていたが、その住居範囲は道南地方だけに限られていた。十七世紀以降幕藩体制下の松前藩がこれを統治すると、経済政策上の観点から和人居住地と夷人居住地とを区別し、道南を和人地（松前地）

とし、それ以北をアイヌ地（蝦夷地）とした。両地区は勝手な往来や移住が禁じられたから、北海道は明治を迎えるまで、広大な内陸部のほとんどが未開発のジャングル地帯のままであった。

明治新政府は開拓使を置いてこの北海道の大開拓を計画、本州方面からたくさんの入植者を移入させた。しかし、全くの密林地帯に鋤を入れることは容易なことではなく、初めての入植者は、単なる自活だけのための行為ではなく、開拓の仕事そのものが後継者への偉大な福祉活動であり、大きな犠牲でもあったのである。また、全く何もないところに人の住む空間をつくるのだから、道路造りにしても、学校や病院を設けるにしても、そのすべてが一々福祉の活動であった。

開拓には宗教団体にも移民が勧められ、また宗教者としての自覚からこの事業に挺身した宗教人も多いことである。以下それらの概略を見てみることにする。

北海道には、慈覚大師、良忍上人、日持上人、立信上人、といったような高僧が渡来したという伝説がある。実際にこれらの僧が来たわけではないが、人々はこのよう

高僧が来たという話を、開拓の精神的な支えにした。宗教はこの面で大きな役割を果しているわけだが、早くに北海道へ渡って寺を建てた僧たちは、そういった面の担い手であった。

福祉というのは、何も物質面のことだけをいうのではない。精神面からくる福祉ということも大切なのである。理屈をいうわけではないが、漢字の「福祉」の「祉」は、「神から授かる幸福」という意味があるのである。

早くから和人が渡来していたとはいうものの、それは一部分の場所であって、道南では江戸時代でもまだ産土神、鎮守神を祀らない村落が多くあった。ここに來てそれらの神を祀って歩いた僧に円空上人がいる。円空は美濃（岐阜県）に生まれ、生涯全国各地に仏像彫刻の旅を続けて有名な人だが、この僧の仏像彫刻の願いは、本地垂迹の信仰によって、全国の社祠に本地の像形を刻み安置して歩くことであった。本地垂迹の信仰からすれば神様の本体は仏像でなければならない。彼はそれを忠実に実行して歩いた。すでに仏身像のあるところには眷属の像を刻んで安置した。円空が北海道へ来たのは寛文五、六年（一六六五—一六六

頃であるが、その頃の道南の村落には、小さな祠さえない所が多く、円空はその場所に一々観音像を刻み、小祠を建ててこれを安置して歩いた。松前藩の記録によれば、なんとその数は二十五カ所にも及んでいる。それらの小祠は後年神社になった。円空こそ仏教理念による産土神造りを現成した人であって、北海道精神史上、この人の存在を忘れてはならない。円空よりおくれて安永七年（一七七八）に渡道し、同九年下北へ去った木喰行道も同じように仏像を遺した。木喰のばあい地藏尊や薬師仏の像を刻んで寺や有缘の家におさめて歩き、それはそのまま、地藏の本願や薬師の本願を衆生に光被させたいという慈悲行そのものであった。この兩人とは異なるが、宝永元年（一七〇四）に正光空念という曹洞宗の僧（越前出身）が来ており、この僧は道南の杜寺に納経し、未踏の山々に祭神を定め、祭日まで指定して歩いた。函館図書館にその貴重な『正光空念納経記』（写本）が蔵されているが、この人の活動も見落せない。ただ残念ながら、この人の定めた祭神・祭日は現在忘れられている。

江戸後期になると、東・西本願寺が競って北海道（当

時、蝦夷）の開拓に力を入れた。これは前にもふれたが、これまでは松前の東派専念寺が、松前藩主と特殊関係を結んで西派の布教を全く認めなかったのに対し、安政の箱館開港で蝦夷島が幕府の直轄となったため、西派の布教が許されたからであって、西派は尋常の布教方法では東派に追いつけないと考え、開拓という新手段に訴え、東派もこれに負けじと応じたからなのである。

西本願寺はすでに天保凶荒のさい信者の蝦夷地移住を計画、箱館在の濁川（今の上磯町字清川）の地に二〇余戸の移民を準備したが、成功しなかった。やがて安政五年（一八五八）再び同地に五五万坪の土地の貸付をうけて、翌年、但馬（兵庫県）、加賀・能登（石川県）、越中（富山県）の各地から信徒移民三七〇余名を入れ、大規模な農地開墾を起すことにした。安政四年六月の本山達書に、「箱館方角に於て新田開発之儀、江州御門徒米屋平七、巽屋和平、井筒屋久右衛門等より右御奉行所之願上、御聞済に相成候儀も、從御本山御世話被成遣候事にて、聊にても御国益に相備候様、弥以御宗則之通、世間仁義五常之道を守り、各後世に不怠、産業に心を尽し、専ら御国恩を可奉

報、御勸諭被為在（後略）」とある。当時のこととていささか時代めくが、開拓への意気込みがよくわかる。

これに対し東本願寺は箱館在の桔梗野（今の函館市桔梗町から七飯町軍川に至る一帯）の開墾に着手した。安政六年（一八五九）四月、本山使僧齊聖寺徳善を以て正式に箱館奉行に出願し、間口一五〇〇間、奥行軍川村に至る数里、耕地約七〇〇町歩、秣場（草刈場並びに放牧地）約五六万八〇〇坪という広大地を貸下げてもらい、「東本願寺開墾場桔梗野」（別称、六条郷安寧村）と称した。入地者は能登・越後・常陸・秋田・津軽・南部・江差などから数十名を入れ、のち一二〇余名に増えた。まず山から木材を伐り出し桁行一〇間、梁間三間の長屋二棟を建て、移住農民を一時ここに収容し、更に耕作地を割り与えて各自に家屋を建設させた。農具・種子・食糧・家畜などについても、東本願寺箱館御坊（現・函館別院）で多大の保護をし、生活の安定を計って、開墾を促進させた。また移住民の教化と指導監督の機関として桔梗野別院を建て、初め広大寺と称し、のち宝皇寺と改称した。居住民に飲料水を供給するため給水溝を造り、道路の開削も行われた。

このようにして開拓の実は大いに上がり、豊かな一村が形成されたが、時代が変わって明治の世となるや、明治四年廃藩置県に関連して、桔梗野も政府へ上地することになったのである。そこで東本願寺は、これまでの同地開拓の実情を開拓使農政役所へ報告し、上地の上は「桔梗村」という一村に取り立ててもらいたい旨を願ひ出、「願之趣聞届、以後桔梗村ト相唱、村役人之義ハ小前一同入札之上取極メ可申出事」との指令が開拓使から付与されて、村は独立することになったのである。本山は金五〇〇両を贈って、村独立整備の助成としたのであった。手塩にかけた娘に心からの持参金を持たせて嫁にやる親心にも似て、東本願寺のそれは実に立派なものであった。明治四年五月、桔梗村・亀田村外四カ村に共同の戸長役場が置かれ、村は本願寺の温かい巢から飛び立って、新しい社会へ向ったのである。現在は函館市桔梗町としてすばらしい街になっている。幕末に北海道各地に入植した移民団体の中には、失敗して離散したものも多い。しかし東本願寺のこの桔梗野だけは非常に成功した例である。

明治二年、新政府は北海道内を分割して、省や藩、士族

などに支配開拓させた。そのさい浄土宗増上寺と真宗仏光寺の出願が認められて、両寺は支配地を有した。だが開拓使はこれに反対し、ついにその刑罰權は開拓使に収め、のちに真言宗泉涌寺が出願したときも、浄屠遊食の徒に支配させるのは不体裁であると横槍を入れ、不許可にさせた。

開拓使の役人中には強い排仏思想の者がいたから、寺院の支配効果は見るべきものがないと報告している。しかし増上寺側の史料などでは、必ずしもそうではなかったことを示しており、また北海道側の史料でも、増上寺などは非常に努力して、他の支配地より良い成績を上げていることがわかる。しかし道の役人には平田篤胤の弟子がいて、北海道史を成文化するに当り、寺院の支配状況を養味囃にこきおろしているが、これはフェアなやり方ではない。支配期間に増上寺が静内（静内郡）を明治二年八月から翌年十月まで、色丹島を同年十二月から翌年十月まで、浜益（浜益郡）を同年十月から翌年八月まで、仏光寺が島牧（島牧郡）を明治二年十二月から同四年八月まで、となつてゐる。

東本願寺の道路開削の件は前に述べたが（「土木關係」）、

同時に移民奨励も強力に行っている。新門光瑩渡道のさいも本州の順路各處でこれを勧め、その後も全国の末寺の僧を動員し、説教・法談の間にもこれを勧説した。末寺僧侶のなかには北海道移民の心得書を作製し、俗語まで作って運動する者も現われ、石狩・天塩・十勝・北見など、いたるところに信徒が入植して、「本願寺百姓」という呼称まで生まれたのである。その『醉歌』と題する俗謡は「トトサンカカサンユカシャンセ、ウマイ肴も膽斗アル、オイシイ酒モ膽斗アル。エゾくくくくエジャナイカ（以下囃子同じ）。兄サン姉サン往カシャンセ、ミカドノ御恩ノ報ジ時、ホトケノ御恩ノ報ジ時……。ウマレ来リシ其日ヨリ、ミンナ朝廷ノ御養ヒ、今コソ御恩ノ報ジ時……。真ノ知識ニ逢フコトハ、難キガ中ニナホカタシ、今コソ御恩ノ報ジ時……。未来往生ノ親様ノ、蝦夷地ヘマデモ御苦勞ヲ、ハタカラ眺メテ居ラレウカ……。エゾ松前ノハテ迄モ、親様ノ御手伝、ワシャ内ニ居ルココロ無イ……。片時モ早く御開拓、成就ナサレテ親様ノ、喜ブ御顔ガワシャ見タイ（以下略）」といったようなもので、尋常ならざる開拓への力の入れようが察せられる。

明治中期になると、北海道への各種開發移民団体の進出が急増するが、仏教界においても寺院・教団の企業發展が見られ、そのための農場経営が盛んになった。

明治二十一年函館監獄署の大谷派教誨師和田義英は、典獄とはかって自宅を院舎に私費で免囚年少者の感化院をつくった。初め有志の寄付で運営し、院生を小細工品や製網に従事させたが、資金が困難になり、逃亡者なども出たので、僻地開墾に転向することを考え、鶉村（檜山郡厚沢部町）に三〇万坪の貸付をうけ、同二十三年五人の院生を移し北海道慈善会（大谷派宮）とした。だが村人が院生をきらうなどの難事にあい、同二十六年解散、そのご「大谷農場」として純然たる小作農場にしたが、大谷派は明治末年売却した。また東本願寺大谷家の名義で雨竜（雨竜郡）に「本願寺農場」が出来たこともあるが、複雑な事情で長続きしなかった。

札幌中央寺住職小松万宗は曹洞宗本山永平寺管長と謀り、明治二十八年上川郡音江村内大部に、未開地四二万坪の貸付をうけ、「永平寺農場」を設立したが、これも明治末年に転売された。

明治三十年、富山県の本願寺派勝興寺の僧が、十勝国野隊原野（広尾町）に八二万五〇〇〇余坪の貸付をうけ、同県下の信徒を移し開墾させることを計画している。

明治三十二年には、新潟県南蒲原郡の法華宗本成寺が、天塩国幌延村字ウブン原野に二四〇万坪の貸付をうけ、翌年、宮城・新潟・富山の各県から八二戸の移民を募って入植させ、そのごも入植者を増した。同四十一年「法華宗農場組合」を設立し、農期中他への出稼ぎを禁止するなどした。日蓮宗関係では、明治十八年に淡路島（兵庫縣）から日蓮宗本門仏立講の団体（講員一四三人・講外員二五人）が日高国静内碧蔭村に入植しているが、これは、郷里で宗門上の迫害を避けて移住して来たもので、大変よい開拓の成績をあげている。

また、教団が学校経営を目的とした基本財産造成のため、農場を営むケースがあり、軍川（亀田郡七飯町）の天台学田などが知られている。

おわりに

以上紙数の関係で、はなはだ粗略な記述になったが、い

ちおう北海道が蝦夷と呼ばれた当時から、ほぼ近年に至るまでの仏教福祉の歴史を記してみた。紙数があれば、その内容を検討し、活動の当否、成果の善悪、今日への課題、などを論ずべきであろうが、今は単に事例の羅列のみでペンを置く。

なお一言だけ付け加えておきたいのは、ここに記した事例は、僧侶個人、あるいは寺院・教団においてなされた活動のみであるが、真の仏教福祉というものは、それだけに止るものではないであろう、ということである。仏教の教えによった人生哲学をもつ在家者の活動もまた、仏教福祉活動の中に入るものと愚考するからである。

例えば、江戸後期に函館（当時、箱館）を拠点に、北洋漁業の先駆者として活躍した高田屋嘉兵衛の如きは、大変な仏教信者であって、露領に拘引中、部下が死んださい、露側がギリシア正教で葬送してやろうとしたのを拒否し、自ら袈裟を製して着し、法名をつけて引導をわたし、仏教で送っている。そのなすところは、常に貧民を救い、慈善を業とし、利潤を独り占めさせずよく地域社会に還元し、道路改修、井戸増設、大火時の救援、失業者対策、植林や

魚目養殖、諸機関への献金など、まさに福祉の権化のような働きをしている。ために函館では中興の祖と崇め、銅像を建て、毎年高田屋祭りを挙行するなど、感謝の意を表わしている。これらの慈善行は仏教信仰に裏打ちされたものであって、こういった面を見ていくことも必要と思うのだが、今回はこれも紙数の関係で割愛した。